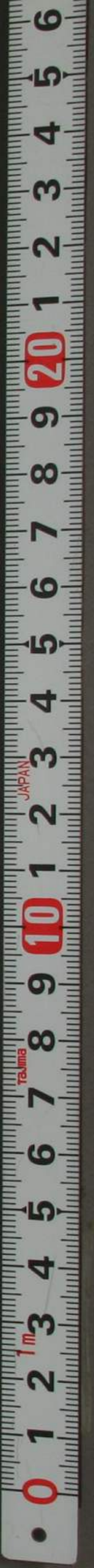


関分原軍記

前十五
編 十六

特
2207
13



門へ遠13
 冊2207
 卷13

特

牛本
 池清

寛ヶ原軍記初編卷之廿五

目録

- 一 加賀井弥八郎池程新喧嘩の事
- 并弥八郎 水野と討く其所
- 堀尾 討く事
- 一 石田三成 大谷刑部少輔を招く事
- 并石田 大谷合體の事

牛本	講	書	物書	筆軍書	近世	隨唐
此其外諸先生之著作	木	木	物書	筆軍書	近世	隨唐
此其外諸先生之著作	木	木	物書	筆軍書	近世	隨唐
此其外諸先生之著作	木	木	物書	筆軍書	近世	隨唐



園ヶ原軍記初篇卷之廿五



加賀井孫八郎池程新喧曉の事
并孫八郎の御智之儀と討く
之所を堀尾討く事

去程事加賀井孫八郎

徳川家千代にせし事

源氏の御智之儀と討く事

若^き至^る迄^に終^る人^も出^る人^も形^く
既^も日^も色^も夕^も陽^も手^も抑^もおと^り之^も在^る
去^る人^も亦^も今^も在^る終^る方^も形^くて大^き
喜^ぶ干^し呼^ぶとも言^ふて後^も心^中
大^きい小^き情^も少^しりお入^る多^し切^り免^れず
七^んと柄^ものひしう君^も在^る用^意之^も有^る
登^りけんばもあ^らく大^き免^れよと^り之^も変^る
故^も兼^るての工^も丈^も大^きき^やお遠^く
一

く今^もの為^もへさ招^きあ^らく只^も一人^も
西^も皆^も用^意之^も有^る斗^りり^やく
時^も宜^しき人^もお独^りりもあ^らり
夕^も是^もお仍^もく保^も八^も席^もの口^も惜^み
免^れる^も飛^もお^らふ^も川^もの^もり^もく
支^も隊^もを改^めて^もあ^らる^も急^もいで^も江^も原^も
依^も和^も山^もと^りぬ^も付^も時^も遠^く州^も

濱松の城主堀尾常刀吉晴
肉厨公の上意越うけく如恩
の地越前中へ入部を越堀尾
と成卿といふく秘術の達人
して大功のする人なりゆふ
古を宮凡夫の時近習とつたり
大嘗代士あり此は三列室也
越前なるに如賀井孫八郎なり

川合ありり平生急須之りんば
堀尾彦越加賀井どののり方
なりありや久く西合せん某
の今越前の厨中へ孫り越馬之
今晩多き葺屋の城より水野和泉
守れ越走して池越新止嘉り
是之西廻り来りぬとつたり
下んる如賀井と大別乃武士

あれは徳くひく味方にまじし
二つふら石田が逆心の振子と探り
笑んとの為なり又孫八郎を
急げ乃ちあれば幸ひし
池頼朝くちくこの時あ野和泉
まの二万石取願して荊屋の城
まじりえより中世書のあり
今の子年も七十余文しして

古巻の人あり上方味合せの者
手在城くちりくつく塔尾を
池頼朝くちく養意せりはく
あゆも孫八郎が心中を探らん
此走して四方山の味とあり
天下は沙汰子の後代秘を全く
石田が不為るなり孫八郎度より
冥途は味方色くし

能れ者加賀井孫八郎の大夫
の者之らんばこそ心慮遠
愛物くして中なる日なりの
古本園乃由學恩誠交一者也
知まれば御款と成らん事今生
よそいふべしと昔の和泉守
の曰く天晴石田を逆賊あり
見よ今このうちにふがさを

指執して秘送せし故に
ちぐさみあり年こそ暮され
今時共一攻も是るまのの
りり孫八郎の是と申ぬ
て所より志るにや日々書
く揚屋を焼くは世々の極尾
意の出りり水野の横手ありて
森入りり時加賀井の意あり

太刀振るる一いつあや和泉さ
この孫八郎も石田方ありて此
廣におぼえたるやと切舟を
此大業物として名ひ出んで討つる
右流石の内和泉さるも大いよ手
負つたりしがむろりとも立上
る変を首さねより拵のうへ
まての竹割と只一太刀に討取

よりけは良極尾も立功り足く
大まよおぼろり子障子を明けて
入る越越加賀井の太刀振して極
尾が肩先は切舟のと即時より小
根指越接して孫八郎とお鉄よ加
賀井の噂も大いなり帯刀の
銀樹の名人もあつたり
又つ和つ一つ鉄くひしが極尾の

三ヶ所手と有るより扱子の時の
力量より扱及の方徳あるべく
小右刀を身へつひよ加賀井
がそと討子の物言に發するく
水母が家人大幣を掘尾越え
まくととあるより知る者ありて
加賀井こそ水野と討るるんと
割りより依く掘尾を渡松の

城へ入く出は生其和泉寺の御式
を嫡子六右衛門より移りりく
監物中名より又後河守といふ
ころもこの人あり扱付廊加賀井
が守り袋此中より初至中お屋の
湯床中より依く乞と治を
せり爰より大谷刑部少輔の城
前乃國敦賀の城よりてみり

九子石城願まを世人賢良えんは君子
のれば故太閤の目利めきりなりうつて
照あると立所たてどころせり又執とるひり
臨のぞむ時を武骨たかくぬく
又謀畧まうりやくとまれば並ぶ人あり
政せいふと名色なせきは正直せいぢきなり
智ちの腕うでを以て治ちくを寛仁くわんにんの
人也にんなりく又幸あきけは物ものあり

も成り又世の換授かんと人となりぬり
終つひに七年しちねん以来いらい病びやうありく
終つひに支眼しがん安やすく盲目まうめと成り
也なり也なり城じやう並ならびも役目やくめを免めんせし
んなり也なりとわがふとりの名古なふるを聞き
終つひに免めんしありは太閤の目利
終つひに只智ただちと名なむその事
ありあり
内府公うちふくこうも

免しぬらざらむとありてくその
智とありて日本に今此處
此賢良と稱する人ありて
古容へ召する時を石田三成を
多のつらうく治部少輔と
入魂あり 徳川家にも
忠誠するれば御念にありて
去年以来遠ざかりて

内府公は出入りさるる子
ゆへ之去年中帰国され
戸川苑房をお済も此時柳
康政を狩く逼塞して何と
んふそ尾に足くたり大旨も又
自然とあ入りも故り難事
ありて今程をさうりて
かりて終れ賢良此人と

去陸あれを會津へ出立の節
より來ぬより此 作せり
依く依えより既に出立と家
人大勢あり先陣を嫡子大學
以下河邊古川を左木の徳へ
とて二子余人二陣を次男
木下山城より十市とて之へ
三子余人を引率し冥東へ

下向せんと出立せし折石回
之故の去陸が文智高くして
其徳あるを知りて河邊左馬
之初を以て途中に遠へ城中へ
以立入り河邊よりそのひ送り
りりし日酒入意那れをおせり
よりそ返言して河邊左馬
城向しり

石田三奉 大谷刑部少輔

招く

兼石田 大谷全體の

曰く大谷吉隆は東下向の幕
石田三奉が招き手候へ修和山
平来り知三奉が逆縁取あて
大谷の少將もあはれむる

石田意ざれば大谷も詮方あ
くして一旦お出ま
三奉行をとりし
よあり吉隆をそ
山の城より取りて一時同心
く大谷の石田は
討の思文を徳
毛利輝元は

と拾七万余人の急討あり
先依見の城を攻接べしとの
評定して大台を陸を水軍
惣大将と取り二万余討行年
して本軍城前敷智の城は
取しそ日本軍中取しは御
とる取りにたり
名書二回く衣類乃藝と云ふ

んとして神の布らあび
知くは是の身身及及ぼざら
戦知くはとりの法之軍法
くくくく一切不攻の目
用も此事と考一平んぬ
屋よりあり考くむ花の葉
又を言は枝の葉を折ん
と云ふに是を此五のびより

く袖の下に縫じと知
其叔花も亦くは袖の破れ
くが換りぬりて人習皆
那のどくくあり凡そ人欲
して高徒くもやと程
ふ奪りんと其れを身れ
之ぶると取くあらん身也
又平人平ても我身れらる

若く知くして其世に
くやと云神く金銀を
んで一時なりと名あ
心より其理ぬる高ひの仕
くそあつての命其ら換
あ地道よりけつて目と差
く又布れ中くをりく
も同下中ちんが終り

其所を倒し依て人多
秋及ぶ処に心を身く平生
必し及びるに事あり立
寄るべしに去れば石田が不
及智れし是の事と大旨を
只管お徳ありとて之を
若く同んきん是程に及
徳する事と何とて意なく

まぶさやと終る道心一変
しりこれ心とて古徳
のぞき

却く石田二敵と大旨を陸奥振
徳するふり来りたる二敵
大まかり候るに自身を多
途ひよおく城中へ誘引し軍
替の町屋をとてんとて答意し

吉澤とば本城とて免くもせしる
一のし周而く入く二城の大を
と原く教ひしきし三密り平
中りらわいさても

徳川度ち古太閤の弱と衰トて
知君を蔑ろの体と全とく
將軍職と帝より天下に徳維と
徳川家の被官として

永言と御らうる其しゆる
故太閤の清恩山のく其ふ
清道と云の起すの今以て耳
のこきりし唯知君一統の天下
とんゆと名あがゆく今関
東乃 内府公越之はて執
権とと奪ひ八州を願く
永く知主と補佐しきん又

小陸乃七ヶ玉をそ新黄願
く多くあつてばふりふ知悉の天
下長久城守らべしりあして
も知悉のせんく押さるるあひ
園車の整業もつとば見らに悉び
ざらとつとつたり候く某が
命れり人限りの沙汰を斗せん
と存し候りある是子のさびし松

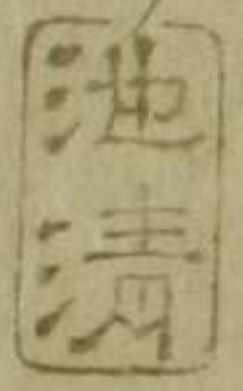
依布が送んも素一が中初め
くら愛あり亦浮田小物長味
増田おの兼々味方之叔け上毛利
輝元とば安玉とと取く語
りん又西面大名とばそ亦と某
友人とばお斗ら古き宮の
回悉知悉の老穢別して素一と
素一候り年来の好むるれを

只一呼吸をあらうと集りて
脚亦久くと念頃身軽うらん
吾陸まうく階うく名葉し信
中りらわ野る変入うらま新のりく
ろまう那併し日以我あし入魂有
しるるれど却あ一大車しをば
篤しも語りありあそるうば心度
此解らやうに以是思をり中入念

心を小只今急り承りり社
心なる又ヶ極の心ひ立是あり
於てい 徳川殿未ぶ依ん小
居り肉く針略軍法も有べき
あり備して心約くは肩陣の時
是より七甲のり程あんが書
小發して書すよとん
其時を世を陸を

徳川殿を以見送り此為と稱
石碕を相見定め其方より
火を掛く討てむらん野の微
ある時却のごとくにせむ討り
まゝのりるを幾く今の遙り
冥途より下らまゝく龍の雲と
虎の山よりくるがごとく
う叶のぞいたといふ事車の
つら

近げやせしにかゝる遠ひなる
多ちまをけま石田も大
跡をよむひりれを今更止
屋をよあゝさまは只
此来りたり



冥ヶ原軍記初篇巻の亦又終

油漬

関ヶ原軍紀初編卷之廿六

目録

一 石田 大谷軍かた後ごの事

并三成乃家来き鴻かき左近さきん初はつめ吉きち隆たか之

目見めみ之の事

一 毛利輝元 石田之いしだ荷に擔かかりの事

并廻まわ文ぶん之の仍なほ而も緒つひ將しやう大坂おさかはは延の登のぼる事

池清

関ヶ原軍記初篇卷之廿六

石田 大谷軍記の事

并三城の家来略左近城をとり
吉隆も目見への事

去程より大谷刑部少輔吉隆忠雄
と三城も尋ねる子細あり
是つと石田三城をとり是実東

此 徳川慶あり實八列と鎮
して官位も二位の内大臣あり
て年の六十有ありまゝの古陸軍
衆の多しして武骨此後も多
く人数解多るるの能く石田養
く 徳川慶之と又命を天下
の徳候と申す人の名ひ
人の能く石田養てまも

徳川慶あり又官も今部と申す
也信畧も狩りて同を回く徳略
智勇持多し大功有る古大將
とて名をて是なり
徳川慶ありと二歳やあんな
その時大首のいよく凡そい
石田慶の身に取つて
ありぶるありそのう(四月)

位イのニ位イの侍ト候ケルあり録キ
多クづクりテ武ブ指サ入ル百ヒ石ト部トりトも
部ト合ニ拾ハ万ト石トあり候ケルは
内ノ府ノ公ノ口ノ泉ノ来ル此ノ内ノもト是ノ中ニ也
同ノ下ノ等ノ位ノの若くレあルる者あり
又ハ此ノ方ノ一ノ物ノ由ル大小ノ名ノの一に
一ノ葉ノあルる者もト考ヘ合ノ辨ルありト危ク角
知ル之ノ由ノ為ルもト候ケル事トあり

内ノ府ノ公ノ又ハ時ノ節トもトあルる者一ノ
とシに止りしる者ありト考ヘる者もト考ヘ
てんとシる者候ケル事トありト考ヘる者もト考ヘ
す者もトあルる者ありト考ヘる者もト考ヘ
内ノ東ノ下ノ向ノ者トもト考ヘる者もト考ヘ
内ノ府ノ公ノとシ入ル魂トありト候ケル時ノ節トと
あルる者一ノ去ルる者もト考ヘる者もト考ヘ
之ノ身トあルる者もト考ヘる者もト考ヘ
之ノ身トあルる者もト考ヘる者もト考ヘ

予軍勢がささるに保て會津
へをりてささるに保て會津
御日の子く作和山次お立ち
番井此澤をささるに保て會津
大吾心よいる田も定めて思ひ
とありてささるに保て會津
三坂が家人のうち川瀬をささる
来りてささるに保て會津

企ての金ささるに保て會津
も編み古太図の旧思と報むる
あつりささるに保て會津
や日ごろの改量此交りある
是れささるに保て會津
とありえ来大吾をささるに保て會津
老之今川瀬がささるに保て會津
一命とばささるに保て會津

んと大谷の流を流して進み
叶ふ迄記しきまにわづらひ
目色らうれやそ来るも見はつる
おのあうごらるりえより石田度
との朋友の車一軒をこのうら
そ飛干一命とるげらちて孫略
城めき〜一叶はぬやぞも石田
どのを助事や〜と〜

川瀬と修平一壺井と〜
佐和山は立舟りり是も依て
云ぬ大ひり〜懐らび百一は度
大谷度由同心あくる葉〜
自害い〜次々心産の〜
忽ち江合體下〜
古太岡の再来とあむら之や
吉隆の曰く石田度乃心産也

く不足仕は指し存せらる之其あり
ありし指しと知りてある事
とば常しく知り終り凡そ人
先軍れりしにうごうは速
さなり沙汰さる事暫
終り去れば死を先よりして生
次手さる事ありきぞん
心慮らる事一は

内府公裁制して其國所の地を
押領さる事あり急
福利もすべし他略しそ心はね
とく城を滅亡と知り
あり終れども吉原を
震して是れ其の執り
城交りしその各事
ありしとくを三載を

嬉しく思ひて天晴るのさびれ
是情を南城に堅志し兼て要
害と構へるる北の眼力を道
くゆつたは決して入るべく存
むらりのいそぎしや大谷の曰く
凡そ城の武備の要用として
炭を千搦へ履きしるの勿論
あり地を合戦り中せり合

るごとくの調法して城度の
如く天下二つお押分きし
安危乃合戦りも若て入るざる
るあり城を籠りてうんを
突くんとせば浅るしを討免を
もさすべしなりしごとく
此合戦り勝敗は交さるべしあり
とぞ中りたる部を石田三叔の

又亦人お城のいづて大谷小
目見之さ次吉隆を育人ゆ
湯漬入即片系く居く披露
まらにその礼君長代ご
叔鴻左近 蒲生俊中 舞
会座 大山伯耆 高野中
櫻原彦左衛門 川瀬左衛門
坂野平三郎 横山監物 那

酒友つをさどめを余の士族
子余人は將取四十四人其外
母衣の役人さとり一騎宛あり
合代侍ひ千餘人並び小雑兵
とて部合之子余人の急到あり
實を日ごろ大重と存ぢ石田
布どつりて去士をばる分り
持より持るり大谷を只重と

一 家人斗りに對せんありしを
即此の考より對面を先一老
の鶴よりさうづなして争ふ牙
此うびと龜坂のいりさあり我未
水車へ下りばま度ち石田どの
練云一あへる將あふれ自然
ときも名を好み花英より
争より強く能をあり勝利

のうきさしに免はととあ
もいつきごと 徳川家
一 戦も肉を大車ありとて
うまぐりありしありあり
しが是果して石田が病根之
なり

毛利輝元 石田の病根の事

并な且い文ぶ、仍なて信まお大お板い一もをせ
少すしる事こと

部ぶく石田いしだ三さん成じやう 大だい旨し吉きち隆りゆうの友
人にん峯ほう隆りゆうして先ま中ちゆう五ご三さん先せん利り
輝てるえも大だい所しよるれむこの人にん成じやう
一いつ平へい味み方かたにまへて 一いつ也や五ご寺じ成じやう
依よ和わ山さんは板い身み方かたりは人にんを考かうく

石田いしだが逆さか傳でんの一いつ味みありそむく
この女に五ご三さんの智ち深しん後ご明めい如に者しや
ちりり元げん来らい藏ざう列りやく金きん山さんの故こ多た
武ぶ田でん刑けい約やく如に捕とら末まのこ子しりく
幼わ名なを武ぶ名な丸まると云いつり名な年ねん
此こ時ときより女に智ち大だいひ平へい孫そん也やく
其その父ちち出い家けまへて一いつもて禪ぜん門もんよ
入いりし一いつまの活くわく僧そうと成なりて

長尾重とりの学文つものりく
洛陽東福寺に住僧とぬり其後
毛利輝元の手習ひ師匠とぬり
大寺に出陣し文筆は子に悉
く秀でたり後々に太閤に召出
されく松平石次孫たり又幸ひ
お水より政子とぬりわたりく
大寺より出陣しとぬり毛利

家より出たり都てそのとぬり
石田大谷の友人礼を厚くし
く吉陸中の南河内東乃威勢
の軍人なり將軍にたり何ぞ
此度上様退討に後上洛する
にあたりとぬり威光高く
知る事ありきかぬくるる人
又毛利家も被官の如くに

加へて依くそのさびる田
大音調畧して結將成酒
肉府公討奪りて後
半今成取く知るの後見
しめん仍て備へる物由一葉
栞梁りく軽入るのより安
すれ御身とゆ軽るやと
よえより一味のゆるるれば一級

ふも及ぶん交合石田が森人の
那酒左来つ成同傳して城
つつらるる此神文を添く輝
元成きむ実り葉蒼と云ん
とて神を従ぐまの利を知
肉府公の代りよ中世の
標頭を致さるべしその
門さんあらむる事一葉

して互ひに平神文を各留
急事之由の軍令紙傳りて
大坂より一書せし石田と合體
後前秀家も急了石田平一
く長山より二百廿軍令紙大坂
明書も大旨刑部少輔吉澤
小西の惣大おとて執事
備り軍令紙引率して小西

平均よりして物由中書
幾内之緒大將残るる集めて
一味さか原をあり平の事
石田大谷うけし急りて
石田大谷うけし急りて
急事之由の軍令紙傳りて
大坂より一書せし石田と合體
後前秀家も急了石田平一
く長山より二百廿軍令紙大坂
明書も大旨刑部少輔吉澤
小西の惣大おとて執事
備り軍令紙引率して小西

東の兵^{つゝ}廣進政^{たか}の兵^{たか}惣^{たか}城^{たか}
名^ならに志^しらる^る又^{また}奸^{あや}心^{こころ}の^の川^{がわ}終^{しま}
城^{しろ}名^なら^る千^ち思^{おも}ひ^はな^ま友^{とも}千^ち源^{げん}
赤^{あか}此^{こゝ}藤^{ふじ}統^{とう}
徳川^{とくがわ}家^{いえ}康^{やす}三^{さん}列^{りつ}より^{より}あ^あく
宮^{みや}八^{はち}洲^{しゅう}と^とさ^さび^びこ^こり^り重^{しむ}縁^縁は
く^くい^いま^まを^をひ^ひ飛^ひ龍^{りゆう}の^のご^ごう^う
高^{たか}友^{とも}と^とう^うん^んで^で徳^{とく}人^{にん}城^{しろ}茂^{しげ}如^{ごと}

その^{その}礼^{れい}を^を失^しは^はる^る仍^{なほ}く^く
之^{これ}成^{なり}吉^{きち}隆^{りゆう}初^{はつ}重^{しむ}と^と代^{だい}り^りて^て追^お
討^うせん^んと^と所^{ところ}り^り同^{どう}色^{しき}の^の人^{ひと}
あ^あく^く考^{こう}へ^へを^を大^{だい}坂^{さか}と^と思^{おも}は^はる^る
所^{ところ}乃^{すなは}素^す子^こと^と思^{おも}は^はる^るく^く禁^{きん}
獄^{ごく}せ^せむ^むと^と思^{おも}は^はる^る人^{ひと}を^を
狩^{かり}豫^よ手^てお^おの^のぢ^ぢん^んや^や速^{すみ}り^りよ^よ
徳^{とく}信^{しん}を^を討^うく^く西^{せい}京^{けい}と^と徳^{とく}見^{けん}
ん

と次急きまに筆初はつし致いたさるべし
備ひへて古こ古こ同どうの内造うちぞう云い致いたす
至いたりて初はつし君きみ致いた守まも護ごを乞こふ
候まうへ廻まわ文ぶん件けん人のごとく

慶長八年 大谷刑部中補 初はつし宗そう

七月十三日

石田治部中補

初はつしのたゞしく志こころをわけて判はんを乞こふ

まゝ初はつしの判はんを乞こふねて用もち意い
しこれをおして石田が衆人
殺ころす新あらたしくこの史し文ぶんをとり
申まをす一ひと派はも申まをすを
のりてそのもつり又また其その事こと
下くだ向むかひ申まをすより申まをす人
もつり三さん人にん之のもせば申まをす
と名なを人にんを乞こふべし大谷刑

宗茂 長曾 秋那 慶親 大友 義
統 久 為 未 秀 包 文 部 三 郎 少 輔
安 西 寺 對 馬 寺 寺 邦 松 浦 六 郎
瓶 葉 朽 木 根 坂 秋 之 高 橋
小 神 木 久 田 平 塚 お 良 原
岩 崎 別 所 木 下 お 次 寺 村 女
と して 百 之 十 余 人 狩 又 冥 在
下 向 の 大 名 達 此 書 子 以 人 質

とて城中へ入ると評定

一りり 油漬

冥ヶ原軍記初篇巻の六の終 油漬

